

ありのままの〈わたし〉

——アウグスティヌス

『告白』第九卷第四章——

松崎一平

0. はじめに

三六八年夏、アウグスティヌスは、帝都ミラノの宿所の庭でカトリックの神への信仰を獲得し（回心）、帝都の栄えある修辞学教師の職を辞することを決断した。葡萄収穫の休暇が始まると、家族や友人たちとミラノ郊外の保養地カシキアクムに赴き、昼は幸福や秩序について同行者たちと、夜は孤独のなかでのれの理性と対話して過ごし、獲得して間もない信仰を深めることに努めた。詩篇第四篇をひとり読み、深くこころを揺さぶられもした。かれが後年、司祭や司教として様々な機会に詩篇全一五〇篇の読解に取り組み、ついに『詩篇講解』という大著が残されたことを考えれば、その出発点というべき場面を考察することは、なんらか意義あることだろう。

1. アウグスティヌスと詩篇第四篇：『告白』第九卷第四章

第九卷第四章のはじめでアウグスティヌスは、カシキアクムの友人の別荘に赴いたことを語り、そこでの対話がカシキアクムの四対話篇に、そこに不在だった友人ネブリディウスとの書簡を介しての対話が『書簡』第三一第一四に結実したことを回想する。それらの対話は、こころの友というべきアリピウスがそのとき強く望んだとおり（『告白』第九卷第四章七節、以下、書名を省き、九・四・七というように略記）、哲学的な探求の性格が勝っている。だが、アウグスティヌスによると、アリピウスの望みを、「主がすでに粉碎していた」（同）。アリピウスは、「あなた〔神〕の独り子、わたしたちの主にして救い主であるイエス・キリストの名」に服し、カシキアクムでの対話や思索は、「蛇たちに反対する教会の、救いに役立つ青草」を含むものとなっていた（同）。このように回想したのちアウグスティヌスは、続く八節でただちに詩篇第四篇を読誦したことを語り始める。引用しよう。

わたしの神よ、なんという声を、わたしはあなたにあげたことか、わたしが読誦したとき、ダビデの詩篇を、信仰の歌を、膨れあがる霊を排除する敬虔の響きを。……なんという声をあなたにわたしはあげたことか、あの詩篇において、そしていかにあなたにむけて、それらによって火がつけられたこ

とか、全世界において人類の傲慢にたいしてそれらを朗誦するように燃えあがらされたことか。(九・四・八)

アウグスティヌスは、カシキアム滞在中のいつか、ひとり詩篇第四篇を読誦した、腑に落ちたことを感動の声を交えて独白しながら。そのように読誦しつつ、かつての仲間のマニ教徒たちに腹を立てながらも憐れんだ、ともいう。続いて詩篇第四篇を、二節から始めていくつかの部分を省きつつ順次引用しながら、いかに感じいかに理解したか、簡潔に説明していく。その回想が事実を再現しているのか、あるいはどの程度再現しているのかは分からない。詩篇第四篇の理解のいかんについては、他稿にゆずる(松崎、2009年、pp. 46-47)。

興味深いことに、自分がひとり読誦する様子を、かつての仲間、マニ教徒に聞かせたかったと述べている。引用しよう。

かれら〔マニ教徒〕が聞いているのをわたしが知らないときに、かれらが聞いたらよかったのに、――わたしがこれらの〔詩篇の〕ことばのあいだに語ったことばをかれらのために語ったと、かれらが思い込まないために。なぜなら事実としてもわたしはそれらのことばを語らなかった、わたしがかれらから聞かれ見られていることを感じたなら。そしてもしわたしが語らなかったら、わたしが自分とともにあなたのまえで自分に、わたしのこころの、家族とともにいるような気持ちから〔語る〕ようには、かれらは受け取らなかっただろうから。(九・四・八)

カシキアムでひとりおこなった詩篇第四篇の読誦を、アウグスティヌスは、かつての仲間が自分に倣って聖書の真実に気づいて欲しいと願いつつ回想している。なぜなら、もしかれらがそのさまを見て聞いていたら、詩篇第四篇の読誦がアウグスティヌスになにをもたらしたか知り、彼らが批判している聖書の真実に耳が開かれたはずだ(同・一一)。ただしそのためには、マニ教徒が聞いていることにかれがまったく気づいていないことが、またマニ教徒もアウグスティヌスが自分たちのために語っていると思わないことが必要だった。じっさい、かれは、マニ教徒のために語ってはいなかった。そのときのこころのありようを、さしあたり「ありのままのわたし」と呼べば、かれもマニ教徒も、「ありのままのわたし」としてそこにいなければならなかったということだ。

いま、「ありのままのわたし」と呼んだこころのありかたについて、以下、『告白』の先行する部分(いわゆる自伝的部分)を素材に少し穿鑿したい。

## 2. 「そうありたいわたし」

『告白』第一巻の少年時代の回想によると、少年のアウグスティヌスは学校

に通い、勉強を怠けると教師たちから笞打たれながら、「荒波さわぐ人間の社会」(一・八・一三)で有力な地位を手に入れるべく必要な知識を身につけていった。少年は成績が良く、周囲から誉められて得意になった。周囲も少年に期待した。少年は、「人間の社会」で評価される才能や知識を獲得すべく努め、見事にそれを実現していく。故郷タガステで文法学を、カルタゴ、ローマで修辞学を教え、ついには帝都ミラノで最高学府の修辞学教師に就任する。それは、最低でも州知事の地位を望みうることを意味した(六・一一・一九)。

以上の過程は、アウグスティヌスが、「人間の社会」が称揚する生き方におのれを適合させる努力を重ね、首尾良く成功しようとしていたことを示している。「ありのままのわたし」を、期待される人間像(レディーメイドの「そうありたいわたし」)に合致させようとしていたのだ。しかし、次第にそのような生き方に疑問を感じ、真の知恵を渴望して哲学をこころざし、その一環としてマニ教に参加もした。いわゆる『ホルテンシウス』体験(三・四・七一八)は、この過程に着火したできごとだ(松崎、2012年および2016年)。

少し時間を戻そう。『告白』第二巻で、一六歳のとき家計の事情でマダウラの学校から呼び戻され、同年輩の仲間たちと遊びほうけ、仲間たちと罪(悪さ)を競ったことが回想されている。前半で人妻との情事がほのめかされ、後半では真夜中に集団でおこなった梨盗みの動機が分析される。前半の終結部で、少年たちがおこないの醜さを競い合い、醜ければ醜いほど威張ったことを振り返って、アウグスティヌスはいふ。

非難されるに値するものが、悪徳以外になにかあるか。わたしは、非難されることがないように、いっそう悪徳的になった。そして、なされればならず者に等しいとされることが起こらなければ、やらなかったことをやったように装ったものだ——わたしが無垢であれば、それだけとるにたりないない奴に見られるので、そして、純潔であれば、それだけつまらない奴と思われるので。(二・二・七)

少年は、非難されるべき悪徳を、仲間たちから非難(馬鹿に)されないためにおこなった。おこないうる悪徳がなければ、やったように装った。集団のなかで少年は、集団が無反省に称揚するおこないをおのれに強いる。集団の少年たちがみな憧れる「そうありたいわたし」を装うために。うまく装えれば仲間へ賛嘆されて、優越感にひたれる。むろん、それは嫉みを引き起こしうるし、偽装が露見すれば集団での地位は失墜し、とどまりづらくもなるだろう。ここには、少年が「人間の社会」で追い求めた、人生を賭したキャリア・アップと同じ構造が見いだされる。

### 3. 原罪と「そうありたいわたし」

ところで、「そうありたいわたし」を装うわたしのありのままは、第二巻の終わりで原罪によって人類が陥った罰の状態とされている（二・六・一四）。集団のなかで、他に勝りたい、嘘をついても勝りたいと願う少年のころは、『告白』の著者によれば、被造物にすぎないのに創造主＝神の位置におのれを置こうとしたアダムの高ぶりの罪と等質だ。「人間の社会」においても真夜中の少年たちの集団においても、成員は、社会や集団が育んだ価値の実現を目指して互いに刺激しあい、転倒的に切磋琢磨している。いわゆる価値とは、物質的な善のいいだ。「人間の社会」では、地位の向上は富の増加を伴う。富は意志のままにおこなうことを可能にする。少年の集団において、悪徳とは、人妻との情事であり、空腹でもないのに梨を盗み豚にくれてやることだ。いずれも、おのれの意志のままにおこなうこと、おこなえることを価値とする。ただしこの場合、意志は欲望とひとつだ。原罪はどうか。

神が善悪の知識の木の実を食べることを禁じ、食べたら死ぬと命じた（創世記二・一六―一七）と告げるエヴァに、蛇はいう、「あなたたちは死によっては死なないだろう。じっさい、神は知っていた、あなたたちがそれから食べる日、あなたたちの両目が開け、神々のようになって（eritis sicut dii）、善悪を知ること」（同三・四―五、『創世記逐語解』に引用されたテキストによる）。蛇のそそのかしの核心は、傍点部分にある。原罪の動機は、被造物（人間）が、神のようになろうとしたことだ。神のように完全な自由を楽しみたい、実現すれば意志＝欲望はいつも満たされるはずだ（原罪は高ぶりの意志の現れにすぎず、現れる可能性＝意志の自由は原罪以前からあった）。完全な自由を楽しむ神が讃えられるように、自分も讃えられたい。アダムの末裔は、このような高ぶりの意志（欲望）を、なんらかのしかたで継承した。讃えられるためには、仲間が、集団が不可欠だ。「人間の社会」が生成せざるをえないゆえんだ。しかし、仲間たちはみな、集団のなかで自由を意志し、仲間から讃えられたがる。ところが、おのれが讃えることは意志に抗う。集団も社会も、そのような意志が互いにぶつかりあう場だ。それをアウグスティヌスは「荒波さわぐ人間の社会」と呼び、苦い海にたとえる（一三・一七・二〇）。

「人間の社会」でも少年の集団でも、成員たちは、アダムやエヴァと同じく、高ぶりの意志をもつ。ならば、高ぶりの意志が、「ありのままのわたし」か。

### 4. 「ありのままのわたし」

『告白』第九巻第四章に戻ろう。アウグスティヌスは、孤独のなか、ひとり詩篇第四篇を読誦した。いや、ひとりではない。第八節冒頭にいう、「わたしの神よ、なんとという声を、わたしはあなたにあげたことか、わたしが読誦したとき、ダビデの詩篇を、信仰の歌を、膨れあがる霊を排除する敬虔の響きを……」

(九・四・八)と。読誦するアウグスティヌスの意識には、たしかに「あなた」が、神が臨在していた。それならかれは、ひたすらに神に独白していたのか。読みながら「わたしは動かされていた (mouebat)」(同・一〇)と、かれはいう。動かされていたのは、こころだ。アウグスティヌスは、神に声をあげながら、神のまえでおのれのこころと対話していたのだ。マニ教徒に聞かせるべきありかたを語る部分を、重ねて引用しよう。

……わたしが自分とともにあなたのまえで自分に (mecum et mihi coram te)、わたしのこころ (animus) の、家族とともにいるような気持ちから〔語る〕ようには、かれらは受け取らなかつたろうから。(同・八)

マニ教徒が見るべきは聞くべきは、自分が神にむけて、他人のいることを意識して身構えることのない、まさにありのままのこころで詩篇第四篇を読誦するさまだった。それは、どのようなさまか。

読誦するアウグスティヌスの意識には、神がいる。かれにとって神は、おのれを無から造った絶対的な存在、全知全能の創造主にほかならない。かれの過去も現在も未来も、すべて神に知られている。かれは、すべてを知る神のまえで詩篇第四篇を読誦し、思うところを語っていく。かれにとって詩篇第四篇は、おのれの過去の罪を語り、キリストの贖罪が自分を罪から救い、そのよろこびのなかで神における平和、天国の平和のうちに憩うこと希望すべきことを語るものだ。聖書が啓示の書であるからには、それを語るのは神、神のみことばだ。すべてを知る神のまえで、かれは、啓示としての詩篇をとおして、自分についての神の知のなにかがしかを発見して確認しているといったふうだ。いくばくか全知の立場から、自分自身を、いうなら俯瞰しているといっている。知のなにかがしかとは、「人間の社会」が捏造した価値をそうありたいと望み高ぶって(罪)苦しんできた(罰)自分を、ありのままに自分の意志によるものとして受け入れたということ、そして、そのようなありように自分を向けかえた神のはたらき(恵み)を見いだして感謝するにいたったという、いわば自覚だ。その知の内実は、詩篇第四篇を読誦するアウグスティヌスにとって、「ありのままのわたし」を指し示すとともに、そのようなありようこそが、まさに「そうありたいわたし」に他ならならなかつた。被造物である人間に内在している神へ向かう重さが、人間の意志(愛)の自指すところと軌を一にしたということだ(一三・九・一〇)。

では、どうしてマニ教徒が見て聞いていることを意識したら、そのようなありようが不可能になるのか。また、そのようなありようのもとで語らなかつたら、マニ教徒が、アウグスティヌスが望むように受けとらないのか(同・八)。おそらくそれはマニ教徒が、アウグスティヌスの神との、うえに述べたような

ありようを共有しないからだ。そのために、マニ教徒を意識すると、マニ教徒の、神へのありようの異質（神へ向かう重さが意志の目指すところと敵対していること）がアウグスティヌスの神へのありように持ち込まれざるをえず、それがかれの神へのありようを、そうでない場合から微妙に違えてしまうだろう。端的にいえば、マニ教徒への批判と愛惜とが交錯する感情を、さらに、おのれを、かつての仲間を批判し教え諭す側に置くことが内包する優越感（高ぶり）を免れることができないだろう。そのとき詩篇第四篇の読誦のありよう——おのれが神のまえで神とともにあるという自意識——は、ひとり神のまえで読誦するときのありよう、つまり「家族とともにいるような気持ち」（九・四・八）と異なり、何がしか身構えた、いわばせまいものとなるだろう。「患難のなかであなたはわたしを寛げてくれた *in tribulatione dilatasti mihi*」（詩篇四・二、九・四・八）。その寛がりの向こうに、人間の求めるべき真の自由がある。

ところで、うえに「意識」「自意識」といったとき念頭にあったのは、*conscientia* ということばだ。「良心」と訳されることが多いこのことばは、*Oxford Latin Dictionary* (2<sup>nd</sup> ed., 2012) によると、動詞 *conscio* に由来する。*conscio* は、古典期には、「おのれの罪を自覚する」といった意味（用例にホラティウス『書簡詩』一・一・六一があげられている）。*conscientia* については、まずは、①「共通に、あるいは（だれかと）ともに知識をもつこと」（*con-*が生きている）、ついで②「自分がおこなったこと、あるいは責任をもつべきことに気がついていること、意識ないし自覚」、最後に③「自分の正しさや行動についての内的な知覚、倫理（道徳）感、良心」と、大きく三つの意味があげられている。詳細な考察は他日を期し、いまは見通しとして語らざるをえないが、詩篇第四編を読誦するアウグスティヌスの内面を踏まえると、①について、アウグスティヌスにとっては、なによりも「神とともに」、希望的には「仲間の信徒とともに」自分を意識（自覚）すること、②③については、自分のありようを善悪の判断とともに意識（自意識ないし自覚）していることだろう。アウグスティヌスが、「*bona*（善い）*conscientia*」というとき（『初学者への訓導について』一〇・一五、一六・二五、『神の国』一四・二八など）、この、おのれが神のまえで神とともにあるという自意識が念頭にあると、特に『告白』八・七・一八（松崎、2006年、特に第三章（四））の、また『詩篇講解』一四六・二や同一四九・四の用例（【参考資料】を参照）に徴してわたしは考える。ならば、「*mala*（悪い）*conscientia*」は、おのれが神のまえで神とともにはないという自意識だ。いずれも神のまえ（だれも神のまえから逃れることはできない！）であって、その点で、『神の国』で、神が「*conscientia* の証人 (*testis*)」（一四・二八）と呼ばれていることは興味深い。いうまでもなく、このような *conscientia* 観の聖書的な背景として、パウロ書簡（ロマ二・一五、II コリ一・一二など）が重要だ。

\*

しかしながら、詩篇第四篇をひとり読むアウグスティヌスの神へのありようはマニ教徒の視覚や聴覚にたいして開かれていて、マニ教徒はそのありようからアウグスティヌスの内面のありようを悟ることができる。アウグスティヌスは考えている。つまり、ひとりとは、必ずしも物理的な意味ではなく、むしろありのままにということ。それは、たとえば教会に集う信徒の集団や修道士たちの集団における、ひととひととのありのままのわたしにもとづく、「家族とともにいるような気持ち」(同)をもってする深いコミュニケーションの可能性の根拠というべきものだ(松崎、2006年)。聖なるひとびとの永遠の生についてモニカとの語り合いながらモニカとともに体験した、いわゆるオスティアの見神が、同じ九巻において語られることは示唆的だ(九・一〇・二三―二五)。また、パウロのロマ書(二・一五)を踏まえて、「文字の知識は、自分のこうむりたくないことを他人におこなうことを誡める、[こころに]書かれた *conscientia* ほどには内的ではない」(一・一八・一九)とアウグスティヌスが語る時、神のまえで神とともにあるひとの自意識の内実が念頭にあるだろう。それには他者との関わりが織り込まれている。いずれにせよ、アウグスティヌスがそのようなコミュニケーションの可能性を認めていることは、「わたし」への神の恵みを語ることで読むひとびとの神への感情を高めようとする(『再論』二・六・一)、『告白』という希なる著作の意図を説明すると思われる。

(二〇一六年九月)

#### 【参考資料】

あなたは譲りなさい、あなたの寝台ではあなたの配偶者に、――キリストの肢体だ、あなたがた二人とも、二人とも彼によって造られ、二人とも彼の血で新たにされたのだから。これらのことをおこなうあなたは神を讃美している、――まったく黙さないだろう、あなたの讃美は。どうだろうか、眠りが来たら。そしてあなたが眠るとき、あなたの悪い自意識(*mala conscientia*)が、あなたを休息からかき立てることはないだろう、そしてあなたの眠りの無害が神を讃美する。それゆえ、あなたが讃美するなら、舌だけでなく、善い業というプサルテリウム(十弦琴)を手にとつてうたいなさい……。 (『詩篇講解』一四六・二)

だれであれ愛を持っているひとを、神を見るために、わたしたちはなぜ遠くに遣るか。彼は自意識(*conscientia*)に注目すればいい。そうすればかれはそこに神を見る。愛がそこに住んでいなければ、神はそこに住まない。ところが、愛がそこに住めば、神はそこに住まう。おそらくかれは、天にいます神を見ることを望む。愛をもつがいい。そうすれば神は、かれのうちに天にいますように住まう。それゆえ、わたしたちはイスラエル[神の国]だ。わたしたちは、わたしたちを造ったかたにおいて喜ぼう。(『詩篇講解』一四九・四)

【参考文献】

・松崎一平「アウグスティヌス『告白』第八卷における回心譚の効用について——「おこない」の意味——」『パトリスティカ』（教父研究会編）第10号（2006年）pp. 6-28。  
なお、本稿は、この論文が残したアウグスティヌスの *conscientia* 観にかんする課題に応えようとするもの。

・松崎一平『アウグスティヌス『告白』——〈わたし〉を語ること……——』岩波書店（2009年）。

・松崎一平「アウグスティヌスとプラトニズム」『中世思想研究』（中世哲学会編）第54号（2012年）。

・松崎一平「「キリストの名」再考——『告白』第三卷第四章八節——」『フォルム・アウグスティニアヌム』（富山大学人文学部哲学・人間学コース人間学分野編）第5号（2016年）pp. 14-20。

なお、『告白』のテキストは、*Corpus christianorum, series Latina, XXVII, editio altera*, 1990を使用した。訳はすべて松崎による。